国語学習プリント　　date：　　年　　月　　日

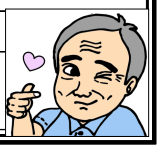
学習内容：「漢文」の訓読 ①

光 P38～P41

学びて時に之を習ふ―「論語」から

＿＿年＿＿組＿＿番

氏名



◎まずは漢文の復習から

―漢文とは―

もともと「やまことば（和語）」という「話し言葉」しか有さなかった我が国。大陸との交易により、文化や宗教、そして文字という「書き言葉」が伝来してきます。いわゆる「漢字」です。漢字の特徴は、「表意文字」といって、文字そのものに意味を持っていることです。これに対して、西洋の文字は、アルファベット（A・B・C・・・）等、記号であって、音を表す「表音文字」ではありますが、ひとつひとつの文字に意味を持つ「表意文字」ではありません。

漢字という外来の「書き言葉」を日本語である「やまことば」と融合していったのです。我が国のもっとも古い書物である「古事記」は、日本語の音や響きをそのまま読めるように漢字を当てた万葉仮名で表記されています。同時期に編纂された「日本書紀」は対外的な側面もあってか、こちらは漢文（中国の言葉）で書かれました。とにもかくにも日本の歴史を振り返る上で「書き記して伝える」書き言葉を持ったのは、このときなのです。

平安時代になると、これまで万葉仮名であった「漢字」をくずして、片仮名・平仮名が生まれます。ここから「表意文字」である漢字と「表音文字」である仮名とのハイブリッド化（組み合わせ）による「日本語」が完成形へと向かっていくのです。

さて、ここでは、日本語の基となった漢語（漢文）について学んでいきましょう。漢文とは次のようなものです。見てわかる通り、漢字だけの文です。この漢字だけの文（「白文」）は、日本語とは文法的にも違うのです。おそらく、漢文を理解するには、日本語として読めるようにすれば、自ずと内容も理解できると考えたのでしょう。漢文を読めるようにするために、「送り仮名」「句読点」、「返り点」といった『訓点』を設けました。「送り仮名」は漢字の右下にカタカナで、読みの順を示す「返り点」は漢字の左下に置きました。これら訓点を配した文を「訓読文」といいます。

矛盾　韓非子　白文

楚人有鬻盾与矛者
誉之曰
吾盾之堅莫能陷也
又誉其矛曰
吾矛之利於物無不陷也
或曰
以子之矛陷子之盾何如
其人弗能応也

訓読文

矛盾　「韓非子」

楚人、有リ鬻グ盾ト与ヲ矛ト者。
誉レ之ヲ曰ハク、
「吾ガ盾之堅キコト、莫ク能ハ陷スモノ也。」
又、誉メテ其ノ矛ヲ曰ハク、
「吾ガ矛之利ナルコト於テ物ニ無キ不ル陷サ也。」
或ひと曰ハく、
「以テ子之矛ヲ、陷サバ子之盾ヲ、何如。」
其ノ人、弗ル能ハ応フル也。

漢字の右横にふられたひらがなは、読みを表す「ふりがな」です。

漢字の右下にふられたカタカナは、「送り仮名」です。

漢字の左下にふられた符号は、「返り点」です。

あとは、先人が編み出した「返り点」の規則を理解できれば、「漢文」を読めるようになります。なお、訓読どおりに漢字仮名まじりで日本語表記にしたものを「書き下し文」といいます。（漢文は古典扱いのため歴史的仮名づかい）

書き下し文

矛盾

楚人に、盾と矛とを鬻ぐ者有り。
之を誉めて曰はく、
「吾が盾の堅きこと、能く陥すもの莫きなり。」と。
又、其の矛を誉めて曰はく、
「吾が矛の利なること、物に於いて陥さざる無きなり。」と。
或るひと曰はく、
「子の矛を以て、子の盾を陥さば何如。」と。
其の人、応ふること能はざるなり。

国語学習プリント　　date：　　年　　月　　日

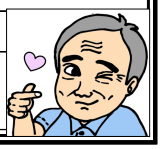
学習内容：「漢文」の訓読 ②

光 P38~P41

学びて時に之を習ふ―「論語」から

＿＿年＿＿組＿＿＿番

氏名



◎漢文の訓読

▽レ点　下の文字から一つ上(すぐ上)の文字に返る
《一つ上の語に返る時に用いる》

▽一二点「一」のついた文字が読めたら「二」へ返る
《二つ以上、上の語に返る時に用いる》

※上下点(甲乙点)も一二点と同様の規則

※返り点は、言葉のとおり「前へと返る(もどる)」のです。
先へ飛ぶことはありません。

※一二三と「三」まである場合(上中下、甲乙丙)
「一」を読めたら「二」に返り、次に「三」に返って読む

◎大前提として上から順に読み、返り点があったら気を付けるとよい。

返り点の規則

▼漢文訓読の練習

例　A B C　↓ A C B

① A B C D　↓ B A D C

② A B C D E　↓ A D C B E

③ A B C D E　↓ A C D B E

④ A B C D E F G H　↓ B C D A F G H E

⑤ A B C D E F　↓ B D E C F A

次は実際の漢文でやってみましょう。

「矛盾」のはじめの部分の読みの順を数字で右にふってみました。

1 2 8 6 3 5 4 7

楚人有鬻盾与矛者。

この数字の順番どおりにカタカナでふられている「送り仮名」は「ひらがな」に直しつつ書いていく(「書き下し文」にする)と、こうなります。

楚人に盾と矛与を鬻ぐ者有り。

ほぼ、日本語らしくなりましたが、気になるところがありますよね。

「与を」のところです。

書き下す(日本語の表記にする)際に注意することは、我が国で『付属語(助詞・助動詞)』にあたる漢字は「ひらがな」に直すことなのです。日本語において、助詞や助動詞を漢字で書くことがないことから理解できるはずです。

楚人に盾と矛とを鬻ぐ者有り。【完成形の書き下し】

▼次の訓読文を書き下してみよう。

百聞不如一見

百聞は一見に如かず　or　百聞は一見にしかず

「不」は必ず「ず」に、「如」は付属語ではないのでそのままでよい。
ただし「如かず」のように、あまり漢字で目にしない自立語(「する」・「いる」など)は、ひらがなにして書いてもよい。

▽もう一つ漢文の訓読・書き下しの際に確認すべきことがあります。
それが、『置き字』といわれるものです。「訓読」の際にふられた送り仮名などによって、漢文の漢字そのものが、日本語においてあまり意味を持たなくなった文字です。
この置き字は、訓読の際(読むとき)も書き下しの際(書くとき)も、ないものとします。

1 詠み飛ばす　2　4　3

学而時習之　↓　学びて時に之を習ふ

置き字

【書き下し文】

主な置き字

焉 矣 于 於 而

順接　逆接
場所・対象・時など
場所・対象・時など
断定・詠嘆
断定・詠嘆

「置き字」とは、日本語で訓読する際に、読まない文字のことです。
もちろん、書き下す際にも書き記しません。
読む場合には、「読み仮名」としてひらがながふられています。

国語学習プリント　date：　年　月　日

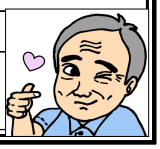
学習内容：「論語」①

㊗P38~P41

学びて時に之を習ふ―「論語」から

＿＿年＿＿組＿＿番

氏名



「論語」は、古代中国の思想家である孔子と、その弟子たちの言行録である。孔子は、混迷を極めた時代に諸国を巡り、「仁」（他者に対する愛情、思いやり）による政治を説いた。二千五百年以上にわたり受け継がれてきたその言葉には、人の生き方に対する鋭い観察と深い思索が込められている。

子曰（いハク）、「学而時習之（これヲ）、不亦（また）説（よろこバ）乎（ずや）。
有朋（とも）自遠方来（タルヨリ）、不亦楽乎（シカラ）。
人不知（シテラ）而不慍（うらミ）、不亦君子乎（ナラト）。」（学而）

▽置き字を□でくくろう

▼書き下し文にしてみよう。

子曰はく、「学びて時に之を習ふ、亦説ばしからずや。
朋遠方より来たる有り、亦楽しからずや。
人知らずして慍みず、亦君子ならずや。」と。

・子＝孔子先生
・曰はく＝おっしゃるには
・時に＝機会があるたびに
・習ふ＝復習し体得する
※不亦…乎　反語表現のひとつ。詠嘆の意味も込められ、通常の反語よりも穏やか。（なんと…ではないか）と訳すとよい。
反語ー表面に出した事柄とはうらはらの思いが本心となる技法
・亦説ばしからずや＝なんとうれしいことではないか
・人知らずして＝人が理解して（認めて）くれないからといって
・慍みず＝不平不満を抱かない
・君子＝徳の高い、理想的な人格者

▼意味をまとめておこう

先生がおっしゃるには、「学んで、機会があるたびに復習し、体得する。なんとうれしいことではないか。友人が遠くから訪ねてくる。なんと楽しいことではないか。世の中の人が認めてくれなくても不平や不満を抱かない。それでこそ君子ではないか。」と。

子曰、「温故（ふるメテ）而知新（レバシキヲ）、可以為師（もつテシタルベ）矣。」（為政）

▽置き字を□でくくろう

▼書き下し文にしてみよう。

子曰はく、「故きを温めて新しきを知れば、以て師たるべし。」と。

▼**故きを温めて新しきを知る**とは、どういうことなのか

四字熟語 **温故知新**

「故きを温ねて」と読む場合もある。

・故きを温めて＝過去の学説や事柄を謙虚に学び習熟し（自分のものとして）、
・新しきを知る＝そのうえで、今に通じる新しい道理を見つける
※可以…矣　（～の資格がある。～ということができる。）の意
・師たるべし＝師となる資格があるだろう

▼意味をまとめておこう

先生がおっしゃるには、「過去の学説や事例に習熟して、新しい意味を得ることができるようになれば、師となる資格があるだろう。」と。

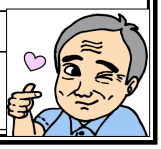
国語学習プリント　date：　年　月　日

学習内容：「論語」②

光 P38~P41

学びて時に之を習ふ―「論語」から

＿＿年＿＿組＿＿番　氏名



子曰、「学而不レ思則罔。思而不レ学則殆。」（為政）

▽置き字を□でくくろう

▼書き下し文にしてみよう。

子曰はく、「学びて思はざれば則ち罔し。思ひて学ばざれば則ち殆し。」と。

・**学びて思はざる**とは、どういう状態なのか

学んだだけで自分で考えない状態

・**思ひて学ばざる**とは、どういう状態なのか

自分で考えただけで学ぶことがない状態

・罔し＝はっきりと理解できない

・殆し＝独断に陥って危うい

▼意味をまとめておこう

先生がおっしゃるには、「学んだだけで自分で考えなければ、明確には理解できない。自分で考えただけで学ぶことがなければ、独断に陥って危うい。」と。

子曰、「知レ之者、不レ如ニ好レ之者。」

好レ之者、不レ如ニ楽レ之者。」（雍也）

▼書き下し文にしてみよう。

子曰はく、「之を知る者は、之を好む者に如かず。之を好む者は、之を楽しむ者に如かず。」と。

・～に如かず＝～に及ばない

▼意味をまとめておこう

先生がおっしゃるには、「それを知っているだけの者は、それを好む者には及ばない。それを好む者は、それを楽しむ者には及ばない。」と。

子曰、「巧言令色、鮮矣仁。」（学而）

▽置き字を□でくくろう

▼書き下し文にしてみよう。

子曰はく、「巧言令色、鮮し仁。」と。

・巧言＝口先だけのたくみな言葉

・令色＝うわべだけ愛想よくとりつくろうこと

・仁＝他者に対する愛情、思いやりの心

▼意味をまとめておこう

先生がおっしゃるには、「口先だけでうまいことを言ったり、うわべだけ愛想よくとりつくろったりするような人間は、本当の思いやりの心が少ないものだ。」と。

※「己の欲せざる所、人に施す勿れ。」や「義を見て為さざるは、勇なきなり。」なども「論語」からうまれた名言である。

ーメモー